

今回の特別講演・シンポジウム開催にあたって

澤田拓士（動物用抗菌剤研究会 理事長）

家畜の生産性阻害因子である細菌感染症の治療において抗菌薬は多大な貢献をしてきたが、同時に耐性菌の選択的増加をもたらすこととなった。その結果、耐性菌にも有効な新薬の開発とともに、既存の抗菌薬をより適切に、慎重に使用することによって耐性菌の増加を抑制し、有効な薬剤をより永く使用可能にする努力が払われている。究極の抗菌薬ニューキノロンとして登場したフルオロキノロン系抗菌薬は、これまで多大な効果を発揮してきた。しかしながら、最近では、家畜由来細菌の耐性化傾向が報告され、本耐性菌による人への健康被害が心配されるようになった。前回のシンポジウムにおいては、臨床現場における抗菌薬の慎重使用の実践と普及をさらに促進させるために、獣医療においても極めて重要な本抗菌薬に関する実態を知ることが目的として「家畜におけるフルオロキノロン剤の使用と耐性発現について」をテーマにして企画した。

今回の特別講演はこのことをふまえ、内閣府食品安全委員会で検討されてきた「家畜由来薬剤耐性菌に関する食品健康影響評価」に関して、本年3月に評価結果が出された「牛および豚に使用するフルオロキノロン系抗菌性物質製剤に係る薬剤耐性菌に関する食品健康影響評価」を中心に食品安全委員会事務局の関谷辰朗先生にご講演をお願いした。また、人医療現場において院内感染は久しい問題であるが、特に最近では多剤耐性菌による感染がクローズアップされている。これらの感染起因菌のデータベース化による人における感染

症対策の高精度化、高効率化に取り組んでおられる東海大学医学部の藤本修平先生に「人獣共通細菌データベースの必要性」についてご講演をお願いした。獣医療における感染症対策に対して示唆に富む内容と思われた。

シンポジウムIでは、「家畜における薬剤耐性菌の現状」を知るべく、特に耐性菌の疫学に焦点を当て、牛・豚由来マイコプラズマについては動物衛生研究所の小林秀樹先生に、鶏由来大腸菌については鳥取大学の村瀬敏之先生に、牛由来ネズミチフス菌については福島県会津家畜保健衛生所の菅原 克先生にご講演をお願いした。

さらに、シンポジウムIIでは、「新効能動物用抗菌性物質製剤」のテーマで、日本イーライリリー(株)の福本一夫先生に「リン酸タイロシン」について、「バルネムリン」および「チアムリン」についてノバルティスファーマ(株)の石井宏治先生に、「オキシテトラサイクリン」について(株)インターベットの豊田雅典先生にご講演をお願いした。

フルオロキノロン系抗菌性物質のリスクの程度が「中等度」であるとの評価結果にはやや安堵を覚えるが、評価の過程での多くの指摘事項をふまえて「適正使用」「慎重使用」の実践と普及へ継続的な努力が必要と思われる。今回も盛り沢山の企画であったが、何れのご講演も広範で豊富な内容を解りやすく纏めて話して頂いた。また、討論も活発でテーマの重要さが伺えた。演者の先生方に改めてお礼を申し上げたい。